

Title	癌と化学療法
Author(s)	太田, 潤
Citation	癌と人. 7 P.21-P.22
Issue Date	1980-03-01
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/24164">http://hdl.handle.net/11094/24164</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 癌 と 化 学 療 法

太 田 潤\*

「癌は癒らないもの」と、一般に固く信じられている。臨床にたずさわる医師の一人として残念な思いがしてならない。しかし、近年広くおし進められている集団検診の成果もあり、又診断技術の進歩により、早期に発見される癌は、年々増加傾向にある。そしてその早期癌の治療成績は、どんどん向上してきている。しかし、現時点では、まだ全ての癌が癒せるものではないことも、事実なのである。その為各種の治療が行なわれ、その効果を上げるべく研究が続けられている。

現在中心となって行なわれている治療法は、外科的手術、放射線照射、化学療法（抗癌剤投与）の3種である。前2者は、癌が局所に限局している場合、その部分を切除する、又は、その部分に照射することによって有効であり、特に外科的手術は、癌の治療の主流をしめている。しかし、以前には、外科的手術にたよらざるを得なかった結核が、ストレプトマイシン等の薬剤の発見により、もはやほとんどの手術を必要としなくなったのと同様に、癌が薬だけで癒せるものになる可能性は十分に考えられる。これが3番目に上げた化学療法である。

癌の化学療法の起源は遠く、エジプト・ギリシャ・ローマ時代に、その起源を求めることができる。しかし、科学的な基盤のもとに、研究されはじめたのはまだ日が浅く、二十世紀半ばからなのである。それから三十余年、各種の抗癌剤が発見、あるいは合成され続けてきた。今日、臨床上に広く用いられている、代表的な抗癌剤は、いずれも、動物に作られた実験的腫瘍に対しては、かなりの治療効果をあげており、癌の発育を著しく抑制したり、あるいはこれを停止させることができる。そして、なかには、癌を完全に癒してしまうことのできるものさえ

ある。しかし、これらの薬剤を、人間の癌に用いても、実験的腫瘍でみられる効果が、同様に得られるとは限らない。その理由の一つとして、特に人間の場合に、抗癌剤の投与により副作用が顕著にあらわれ、抗癌剤の投与の続行ができなくなることが考えられる。現在のところ、癌細胞だけを選んで破壊する薬剤はなく、多かれ少なかれ、正常細胞にも影響を及ぼすのである。この正常細胞への影響が、すなわち、嘔気・嘔吐・脱毛・貧血・白血球減少・血小板減少・口内炎等の副作用をもたらす、抗癌剤を、より高濃度に、より選択的に、癌細胞に作用させ、なおかつ、その副作用を最小限におさえるべく、各種の投与方法が研究されてきている。

抗癌剤の投与方法として、全身に薬剤を投与する方法と、癌の存在する局所にのみ、投与する方法とがある。

## —全身的投与方法—

全身的投与方法としては、静脈内注射法、筋肉内注射法、経口投与方法、坐薬として投与する方法等が行なわれている。すべて、その薬剤が血流を介して、全身に分布し、その効果を発揮することをねらいとしている。もっとも多く行なわれている静脈内投与方法では、それぞれの抗癌剤に適当と思われる、投与時間（すなわち点滴で行なうべきか、普通の静注法で行なうべきか）、投与間隔（すなわち、何日毎に行なうべきか）、投与期間（何日位い続ければよいか）、等が検討され、最適であると思われる方法がとられている。

## —局所的投与方法—

局所的な投与の目的としては、前述した副作用を最小限におさえ、又、癌組織へ抗癌剤をよ

\* 大阪大学微生物病研究所附属病院外科

り高濃度に分布させることにより、治療することを目的としている。たとえば、表在性の癌の場合には、その癌組織そのものに注入する方法・軟膏に抗癌剤を含ませ塗布する方法などが行なわれている、病創から薬剤が吸収され、近在のリンパ節にも作用し、転移巣が縮少することもある、又、癌性腹膜炎や癌性胸膜炎に対しては、抗癌剤を腹腔内や胸腔内に投与注入する方法もある。

そして動脈内注入法も、又有効な治療法である。この原理は、癌組織を栄養する動脈内に、抗癌剤を注入して、癌に対して強力な作用を期待しようとするものである。しかし、本法は全身のいかなる部位の癌に対しても、利用できるわけではない、静脈内投与のように、毎回針を刺して注入するというわけにはいかない。それ

故、動脈内に抗癌剤注入の為の、チューブを留置しなければならない。そのチューブを何処から挿入し、どこを經由しその先端をどこに留置するかは、その癌の存在する場所によってそれぞれ変えられている。この場合でも、やはり、最適の投与時間・投与間隔・投与期間等が検討され実施されている。

抗癌剤は、生体特に人体にとっては異物であることは、再三繰り返したとおりである。そして現在行なわれている癌化学療法は、白血病等の一部の癌を除いては、補助的療法の域はでない。しかし、その研究は着々と進められており、薬だけで癌が癒る時代が来るのは、そう遠いことではないかもしれない。又そうなることを心から願って止まない。